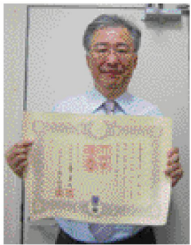


## 日本の産業社会に貢献 地方大学から日本、そして世界へ!



富山県立大学  
工学部 生物工学科  
教授 浅野泰久

この度、応用微生物学の分野で栄誉ある紫綬褒章をいただき、大変嬉しく思っております。これまでご支援いただいた大学関係者をはじめ、研究協力会員企業の皆様に、厚く御礼申し上げます。受章内定の連絡を聞いた時は、とにかく驚きました。紫綬褒章は、やはり経験豊富な方々が受章してこられたため、私のような若手が受章できるとは思っていませんでした。また、地方大学の教員が受章することも、これまであまり例がなく、予想もしていませんでした。

そのような中で受章できたのは、会員企業の方々と、社会に貢献できる、実用化を視野に入れた研究をさせていただいたからだと考えております。社会において実用化されているということは、何よりもその研究の独創性の証明になります。また、実用化を視野に入れた基礎

研究に、大きな面白みを感じます。他と同じような研究ではなく、Only Oneの研究でなければ、実用化できない時代であると考えます。これは素晴らしいことであり、特に応用微生物学が関係するバイオ医薬の分野は、新しい診断法や医薬の製造法開発にも繋がります。

今後は、JSTの戦略的創造研究推進事業(ERATO型研究)における時限的なプロジェクトの中で、新しい科学技術の源流を生み出すことを目的として、独創性に富んだ探索研究として採択いただいた「浅野酵素活性分子プロジェクト」を進めていきます。微生物、植物及び動物が有する高活性な酵素分子の反応を探究し、有用物質生産や健康診断法などに資する手法の基盤創出へと展開することを目指して、取り組んでまいります。そもそも、私がこの応用微生物学、酵素化学工学の研究に進んだのは、高校生の時に全国各地で起こった公害問題がきっかけでした。高校の化学の先生から、微生物の工業利用の分野は大変活発だという話を聞きました。私は、公害のない、環境に優しい生化学工業を追究したく思い、この分野に進みました。当時はバイオテクノロジーという言葉もなく、いわば時代の先をいっていたことが後から分かりました。紫綬褒章をはじめ、このように栄誉ある研究に取り組むことを感謝し、今後も研究に邁進していきたいと思っております。

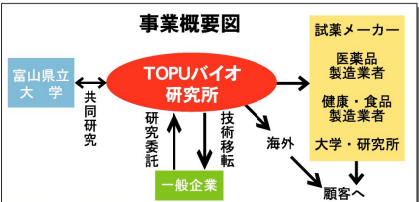
## TOPUバイオ研究所設立

文科省の知的クラスター創成事業「ほくろく健康創造クラスター」(2008年から5年間)の事業計画に基づき、3年間が終了した時点で、富山県立大学発ベンチャー企業として、株式会社TOPU(トップ)バイオ研究所を設立いたしました。3年間の事業の中で研究は順調に進みましたが、大学の教員だけでは企業化には問題があ

り、関連深い業界の研究協力会会員企業の方々に経営陣としての参画を呼びかけていました。その中で株式会社廣貫堂の大野取締役役に賛同いただき、大学の事務局の協力も得て、設立にこぎつけることができました。大野社長の下、役員には私の他、知的クラスター創成事業の研究代表者である浅野教授、更に廣貫堂の塩井社長にも入っていただきました。浅野教授は、最近紫綬褒章を受章され、TOPUバイオの活動にも拍車がかかるかと期待しています。

今後は、事業計画にある5年後の社員10人、売上5億円を目指して取り組んでいきます。そのためには、まず大学内の先生方にも協力を呼びかけていきたいと思っております。「薬都富山」をもち立て、日本だけではなく世界を視野に入れた事業の展開を目指してまいります。

(取材:富山県立大学 工学部 生物工学科 榎利之教授)



## 富山県立大学研究協力会事務局

〒939-0398 富山県射水市黒河5180 TEL: 0766-56-0604 FAX: 0766-56-0391  
E-mail: tpu-liaison@pu-toyama.ac.jp

URL <http://www.pu-toyama.ac.jp/kyouryokukai/>



2011年8月発刊  
No.012

# Techno Times

富山県立大学研究協力会 会報



富山県立大学研究協力会は発足から8年目を迎えました。昨年、研究協力会の新たな会長として、株式会社スギノマシン代表取締役社長の杉野太加良氏が選任されました。

今回、研究協力会の今後あるべき姿について、今年4月に富山県立大学学長に就任した前澤邦彦氏とともに想いを語っていただきました。

## 見えない壁を破ることから 得られる連携促進

杉野会長:組織間の連携強化を推進していくと、お互いに変わる必要も出てきますが、組織の改革を阻むものとして、「5つの壁」という考えがあります。まずは「認識の壁」です。他人に聞けば誤解だと分かることであっても、人は思い込みや先入観で判断してしまいます。

次に「行動の壁」です。世の中が急速に変化している中で、チャレンジしなければいけないと思っても、変化を恐れて行動に移せないことがあります。

3つ目に、「知識・情報不足の壁」です。新聞やテレビ、あるいは書物や雑誌は「ニュース」です。「ニュース」と「情報」は違います。加工されていない生の「情報」を得るためには、人と直接会うことが重要です。

4つ目の「仕組みの壁」は、システムです。人が集まり協力して結果を出すには、なんらかの仕組みが必要で

す。県立大学では、産学連携のマネジメントシステムが確立されつつあるのではないのでしょうか。

最後に「態度の壁」です。何かに取り組む時の態度や身構えです。ここで最大の弊害となるのが、諦めです。やってもだめだということですね。企業も大学も以前よりは良くなっていると思いますが、まだ壁が厚いと思います。

前澤学長:「態度の壁」は研究でも見られます。研究者は、難しい問題と簡単な問題のどちらかにチャレンジするかで分かります。難しい問題は成功する場合と、残念ながらそうでない場合があります。しかし、困難があるからといって、閉じこもってしまっはけません。長い目で見て成果を上げる人は自己実現欲が強く、とにかく難しい問題に挑戦します。そういう諦めない態度が研究者には大事でしょうね。

杉野会長:こういうことはこれまでも言われてきましたが、なかなか進みません。この度の震災でも様々な機関が、個々で取り組みをしています。大変なお金と時間をかけているにもかかわらず、まともらずに、未だ何も解決していないように思います。

前澤学長:トップに立つ指導機関が、強力にリーダーシップを発揮し、引っぱっていかないと解決しないでしょうね。

杉野会長:その点では、学問の分野もそうだと思います。前澤学長にも、学問はそうあるべきということを念頭において進めていただきたいですね。大学は企業人が気軽に訪れるようにしてもらいたいと思います。「どうぞ、いらっしやい」という感じで。

前澤学長:平成16年に地域連携センター、そして研究

目次

- 対談特集 富山県立大学研究協力会 会長 杉野太加良氏 × 富山県立大学 学長 前澤邦彦氏 ..... P1~3
- 富山県発! 頑張る企業の経営者は想いを語る ..... P4・5
- 事例紹介 ..... P6
- テーマ別研究会発足 ..... P7
- 富山県立大学研究協力会 会員企業紹介 ..... P8・9
- Seeds Information ..... P10・11
- Techno Times News ..... P12